

2019年1月27日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「イエスの招き」

聖書：ルカによる福音書5:27～32

イエスの「招き」は、罪人呼ばわりされ、言われのない差別を受ける人々との交わりにあった。人間としての尊厳を奪われ、交わりから切り捨てられる人を本当に大切にし、人間としての場を与え、愛し、愛されつつ生きる幸いへと招くためにであった。同時にその「招き」は、彼らを差別し、切り捨てる社会に対し、一石を投じることでもあったのである。

ヨハネ福音書 9 章に、生まれながらに目が見えない青年に対して、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」という人々の問いに対し、イエスは「本人でも、両親でもない」とはっきり、罪と病との因果関係を断ち切る。しかし人々はなおも言い張るので、その人々に対し、「自分は見ると言い張るところに、あなたがたの罪がある」と一喝した。イエスの視点は、小さくされる者の側に立ち、不条理な社会に対する叫びでもある。

31 節以下、イエスの言葉に「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。この言葉はイエスがおっしゃった言葉としてどう聞くべきか？ ここでは「罪人」が「病人」に見立てられている。「病人」は「罪人」と見なす当時の風潮を、真っ向から否定してこられたイエスご自身が、「罪人」を「病人」に見立てることがあろうか？

実はこの「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である」という部分は、そもそもイエス以前のギリシア哲学において語られた言葉であった。これはイエスが語られた言葉ではなく、後の人がイエスがこの世に来られた意味を分かりやすく言い表そうとギリシア哲学の言葉を引用したのであろうと言われている。

むしろ、イエスならこう言われたのではないか。「本当に医者が必要とするのは、重い病氣を持っているのに、自分は大丈夫だと思い込んでいる病識のない人である。わたしが来たのは、罪人呼ばわりされている人を悔い改めさせるためではなく、自分は正しい、自分は義人だと思い込んでいる人を深く自分の罪と向かい合わせるためなのだ」と。イエスの歩み、本質を見る時、イエスというお方は、そう語られたのではないかと思う。イエスの「招き」には、そのような意味が込められていることを、当時の時代背景をかんがみながら考えたい。(神谷)